

# 日本における「清朝史」研究の動向と近年の「新清史」論争について

## —加藤直人著『清代文書資料の研究』を中心に— Trends of “Qing Dynasty History” Research in Japan and the “New Qing History” Debate:

### Focused on Kato Naoto; *A Study of Archives of the Qing Period*

金 振雄

JIN ZHENXIONG

東京外国語大学大学院博士前期課程

Tokyo University of Foreign Studies, master's student

*Quadrante*, No.20 (2018), pp.169-174.

#### 目次

はじめに

1. 日本における「清朝史」と『清代文書資料の研究』

2. 「新清史」をめぐる議論

おわりに

#### はじめに

現在、筆者は清代の特徴を明らかにすべく、清代皇帝の側近のような存在であった侍衛と呼ばれる集団を中心に研究を行っている。清代に関する研究は世界各国で行われているが、その主張には大きく分けて中国での研究者に代表される「漢化」論と、日本やアメリカに代表される「満洲特性」論がある。「漢化」論に関してはその名の通り、清の成功を中国の圧倒的な数を占める漢人との「同化」であるとする主張である。一方、「満洲特性」論とは清の成功を漢人との「同化」ではなく、自民族の伝統を堅守した結果とする主張である。後者の主張の代表的な研究は日本における「清朝史」と、2000年代から急速に勢いを伸ばし始めたアメリカ発祥の「新清史」である。この「清朝史」と「新清史」には「満洲特性」を主張する以外にも、大きな共通点がある。どちらも満洲語やモンゴル語をはじめとする、少数民族言語資料を重視しているという点である。しかし、清代の各種史料は現在確認されているものだけでも、優れた研究者が一生を費やしてもその内容の九牛一毛しか確認できないほど膨大な量にのぼる。そのなかで、2016

年に『清代文書資料の研究』<sup>1</sup>と題される、これまでの日本における清代文書資料研究の集大成ともいえる著作が出版された。そのため、本稿ではこの『清代文書資料の研究』を中心に、日本における「清朝史」研究を整理したうえで、類似する研究である「新清史」をめぐる議論についても整理を行いたい。

#### 1. 日本における「清朝史」と『清代文書資料の研究』

本節ではまず日本における「清朝史」の特色を簡単に整理しておく。なお、類似する用語として主に社会経済史中心の中国近世史研究を指す「清代史」と言われる分野もあるが、本稿では主に時期的には入関前中心、対象としては政治史・制度史中心の研究を指す用語として「清朝史」を用いる<sup>2</sup>。

日本における「清朝史」には大きく四つの特色があると言える。

第一に、満文檔案を重視することが挙げられる。1905年に内藤湖南が盛京にて通称『満文老檔』を「発見」し、1912年に撮影したことから、日本において「清朝史」は徐々に研究され始めた。その代表的な人物として、白鳥庫吉、内藤湖南、稲葉岩吉、和田清、安部健夫、三田村泰助などが挙げ

<sup>1</sup> 加藤直人『清代文書資料の研究』汲古書院、2016年。

<sup>2</sup> この定義は下記の論文に基づくものである。

杉山清彦「大清帝国史研究の現在：日本における概況と展望」『東洋文化研究』10号、2008年、pp.347-372。



られる。

第二に、日本における「清朝史」研究者は自身で満文などを理解し、翻訳する能力がある点が挙げられる。中国において満文の翻訳は一部の研究者を除き、長らく中国第一歴史檔案館満文部の専門家が行っていた<sup>3</sup>。また、「新清史」は満文などの非漢民族言語からなる檔案史料の重要性を主張しているが、アメリカなどにおいても多くの研究者は満文を十分に習得できていない<sup>4</sup>。

第三に、実地調査を重視する点が挙げられる。日本では内藤湖南をはじめ、多くの研究者が長らく、中国において実地調査を行ってきた。他にも代表的な研究として、細谷良夫が研究代表者であった「満州語文献を中心とする清朝成立期をめぐる諸史料の総合的研究」(1994年度～1996年度)<sup>5</sup>が挙げられる。この研究では日本だけでなく、中国、ロシア、イタリアからの研究者も加わり、各地の檔案館、図書館、大学等の機関で史料研究を実施した大規模なものであった。

第四に、日本における「清朝史」は実証研究を主としている点が挙げられる。日本では長らく「お家芸ともいべき一次史料を駆使した実証研究」<sup>6</sup>が行われてきており、加藤直人著『清代文書資料の研究』もその代表的な例である。

では、『清代文書資料の研究』は具体的にどのような著作であったのだろうか。ここでその著者と内容について整理を行いたい。

『清代文書資料の研究』の著者である加藤直人氏は現在、日本大学文理学部史学科で教授を務めており、過去に東洋文庫において『旧満洲檔』や『内国史院檔』など、清代初期の歴史を研究するにあたり必読とも言える数多くの資料を研究してきた。これらのことから、氏はまさに日本の満洲史研究を牽引してきた研究者の一人であると言える。著者が本書を執筆した背景には、清朝において時代が下るにつれ、満洲語の利用者が徐々に減

少していったにもかかわらず、満文で書かれた文書が作成され続けた理由について明らかにした研究はほとんど見られない、という問題意識があった。

本書は三部構成となっている。まず、第1部ではこれまでの先行研究ですでに扱われた、入関前の清(後金)朝における文書制度について学術的な検討を行った。また、すでに使用されている編纂史料についてはその使用に関する注意点、近年新たに使用可能となった史料に関してはその紹介と利用価値について検討を加えた。次に、第2部では宮崎市定「満洲語は満洲朝廷の治下に於いて已に過去の遺物となってその生命を失っていた」<sup>7</sup>という見解にこたえる形で、天理大学附属天理図書館に所蔵されたいわゆる「辺疆」檔案をもとに19世紀以降の清朝、特に新疆などのいわゆる「辺疆」における文書制度の変遷と特徴について、検討が加えられている。最後に、第3部では清の入関後から19世紀末までのさまざまな形態の文書から、それぞれの文書の概要と特徴について述べられている。また、当時の清朝における満語と漢語の使用状況について検討が加えられている。

本書の特色として、まずは研究対象とした文書資料そのものが貴重である点が挙げられる。本書で使用された文書資料は著者らが直接フィールドワークを行い、現地で収集した布特哈総管衙門副総管ボドロ(博多羅)の「直訴文」はもちろんのこと、「原典」史料として、本書第1部では「内国史院満文檔冊」、第2部では「原典」ではないものの原檔案から抄写された「辺疆」関連の檔冊、第3部では同じく抄写された『屯田記略』などが用いられている。これらの史料はいずれも直接現地に赴かなければ確認できない、極めて貴重な文書資料ばかりである。

本書の二つ目の特色として挙げられるのは使用した史料の「信頼性」である。先述したように、本書で使用された史料の多くが原資料や満文で記された文書である。書中でも論じられているように、『方略』、『実録』といった編纂物は、原資料を中途半端な形で数分の一に抄録(または抜き書

<sup>3</sup> 劉小萌「清朝史中の八旗研究」『清史研究』2010年第2期、2010年、pp.2-3。

<sup>4</sup> 定宜庄・欧立德(Elliott, M. C.)「21世紀如何書写中国歴史：“新清史”研究的影响与回应」、『歴史学評論』第一巻、社会科学文献出版社、2013年、p.144。

<sup>5</sup> 科学研究費補助金(06044194)「満州語文献を中心とする清朝成立期をめぐる諸史料の総合的研究」(代表：細谷良夫)

<sup>6</sup> 杉山清彦(前掲論文)、p.365。

<sup>7</sup> 宮崎市定「清朝における国語問題の一面」『東方史論叢』第1(北方史専号)、1947年、p.55;のちに『宮崎市定全集』14、岩波書店、1991年、pp.336-337。

き) するため、事実を大幅に歪曲(無意識または意識的に)してしまう場合が少なくない<sup>8</sup>だけでなく、同一の書物においても満文と漢文で表現が大きく異なる部分が非常に多い。一方、原資料や満文の記述は当時の状況を如実に記録していることが多く、当時の人々の思想を知るうえで極めて「信頼性」が高く、重要な手掛かりとなる。

本書の三つ目の特色として、本書は広大な範囲を考察対象としているが、それぞれの考察対象に対して精緻な考証がなされている点が挙げられる。例えば、第1部第2章では「すくなくともホンタイジ即位直後には…〔中略〕…その日の出来事を記録する」<sup>9</sup>「値月」制度が存在し、少なくとも天聰6年まではこの制度が維持されていたことや、これがもととなって「満文原檔」などが編纂されたことを明らかにした。また、続く第3章でも「逃人檔」の記事がどのように「満文原檔」に収められたかについて明らかにするなど、これまでの研究では正確に把握することができなかつた清の入関以前の文書制度についてかなりの程度解明した。さらに、第2部第2章では当時の対ロシア関係文書はすべて満文が用いられていたこと、そして第3部第2章ではこれまで研究が非常に少なかった、清朝の女官の満洲語の使用状況についても明らかにした。

しかし、本書には疑問点も存在する。著者は満洲語文書について、「満洲語による文書記録や臣下からの奏疏等は、すくなくとも清末にいたるまで日常的に継続され、かつ有効に利用されていた」<sup>10</sup>と評価している。確かに、清代の文書は満洲語でしか記されていない文書も多いため、近年清史研究においてますます重視される存在となっている。しかし、本書には清全体を見渡したとき、果たしてそれらの満洲語文書がどれほど有効に利用されていたか、そして「清末」とは具体的にどの時代を指しているかについては必ずしも明示されていないように思われる。

例えば、1913年に発行された『外交部儲藏条約原本編号目録』<sup>11</sup>に収録された、清とロシアが結

んだ条約に関する文書のうち、漢文が記載されている文書は24件であったのに対し、満文はわずか4件であった<sup>12</sup>。他にも、著者は「臣下からの奏疏等」も少なくとも清末まで有効に利用されていたとしているが、同治、光緒朝の実質的な最高権力者と言われる慈禧太后に仕えていた徳齡が著した『慈禧野史』によると、「老佛爺は満文について本当に知識が少なく、もはや全くわからないといっても良い程度である…〔中略〕…朝廷の公文についても一部は漢文と満文が併用されているが、太后が閲覧、指示する際はいつも漢文のみ閲覧し、満文は閲覧しなかった」<sup>13</sup>のである。

このように、同治、光緒期には実質的な最高権力者をはじめとする有権者の多くが満洲語を理解できていなかったとすれば、この時期の清朝においてはすでに、満洲語文書は実質的に国家上層部に対する「情報伝達手段」としての有効性を失っていたと言えるのではないだろうか。

以上、『清代文書資料の研究』について整理した。本書を「清朝史」の特色と比較すると、そのすべての要素を兼ね備えていることがわかる。まず、本書には多くの満文資料が使用されており、著者も「乾隆中期以降の満洲語文書の存在を、単に『満缺』等に属する人の『義務的な所産』として矮小化して捉える」<sup>14</sup>べきではないと明言していることから、満洲人特有の満文を極めて重要視していると言える。また、先述したように本書の著者は非常に高い満文能力を有しており、フィールドワークでの成果も本書に盛り込まれている。ただし、村上信明氏が「本書の白眉は、やはり第一部」<sup>15</sup>と評価する一方で、その後の第2部、第3部に関しては女官の満洲語問題について「読み書きの問題なのか、口語の問題なのか判然としない」<sup>16</sup>とコメントしており、また、本稿で指摘したように「清

<sup>12</sup> なお、イギリスやフランスをはじめとするその他の諸外国と結んだ条約において、満文が使用された例は皆無であった。

<sup>13</sup> 徳齡著、秦瘦鷗訳『慈禧野史』慈禧記実叢書第4巻(遼沈書社、1994年)、p.176。原文「老佛爺对于満文，实在認識得少，少到差不多可以說完全不識…〔中略〕…朝廷上的公文，雖有一部分是漢文和満文并用的，不过太后批閱起来，總是只閱漢文，不閱満文」。

<sup>14</sup> 加藤直人(前掲書)、p.298。

<sup>15</sup> 村上信明「書評 加藤直人著『清代文書資料の研究』」『中国研究月報』第71巻第2号、2017年、p.36。

<sup>16</sup> 同論文、p.37。

<sup>8</sup> 加藤直人(前掲書)、p.163。

<sup>9</sup> 同書、p.63。

<sup>10</sup> 同書、p.4。

<sup>11</sup> 外交部総務庁統計科編『外交部儲藏条約原本編号目録』(外交部総務庁統計科、1913年)。

末」の定義がややあいまいであることからわかるように、本書の重点はあくまでも「清初」の文書制度の解明におかれている。さらに、本書は村上氏が評しているように、従来の「清末」における満洲語を「過去の遺物」とする主張のアンチテーゼであるが<sup>17</sup>、宮崎の最終的な結論が「たとえ言語上は漢人に一步を譲りても、決して中国的機関の襲用にあらずして、満人の独創に基づく新發明である」<sup>18</sup>となっているように、両者は必ずしも矛盾しているわけではない。つまり、本書は結果的には宮崎を含む戦前の日本における清史研究者の「満洲特性」を重視する「清朝史」の主張をさらに補足する形となっているのである。

しかし、本書は書名の通り、あくまでも『清代文書資料の研究』であるため、当事国である中国においてはまだ大きな反響は見られない。一方、「新清史」は中国で大きな反響をよんだ。そのため、次節では「新清史」をめぐる議論について、整理を行いたい。

## 2. 「新清史」をめぐる議論

1967年、何炳棣はアメリカにおいて“The Significance of the Ch'ing Period in Chinese History”と題する論文を発表し、清の成功は支配者層である満洲人が漢人と「同化」したこと、つまり「漢化」が大きな役割を果たしたと主張し<sup>19</sup>、大きな反響を呼んだ。その29年後、この説に疑問を感じた Evelyn S. Rawski は1996年に開かれたアジア研究協会年次大会の会長演説の際、清は「漢化」、もしくはそれに準ずるものなどではなく、むしろいわゆる「国語騎射」、つまり自民族の言語である満洲語や伝統である騎射を保ち、また、それぞれの地域で異なった体制で統治していたため、中国の長期的支配を行うことができたとした<sup>20</sup>。これに対し、何炳棣は再び“In Defense of Sinicization: A Rebuttal of Evelyn Rawski's "Reenvisioning the Qing"”という論文を発表し、満洲人の「漢化」は

満洲人固有の伝統を否定するものではないが、かなりの程度で「漢化」したことが成功の要因であったと改めて自らの論点を主張し、Evelyn S. Rawski に反論した<sup>21</sup>。この「論争」を契機に、いわゆる「新清史」に関連する議論が世界的な規模で広く行われるようになった。

「新清史」には「新四書」と呼ばれる4つの代表的な著作が存在する<sup>22</sup>。これらの著作に基づくならば、「清朝史」と「新清史」には具体的にどのような相違点があるのだろうか。

まず、最も大きな相違点としては研究の出発点が挙げられる。日本におけるアジアに対する研究は「かつて日本のアジア研究は侵略的研究体制のなかでおこなわれた」<sup>23</sup>と当時の研究者自身が振り返るように、政治的な出発点があった。これはアメリカの清史研究者が以下のように述べるように公認の事実であり<sup>24</sup>、「アジア」の中に清朝・満洲が含まれていることも明らかである。

…稲葉岩吉、和田清、浦廉一、今西春秋、三田村泰助、宮崎市定らは満洲人の支配エリートらの独特性と、満洲の独特な歴史的、地理的背景を強調した。これらの研究の一部は満洲が中国の一部ではないことを証明することによって、「異民族」が中国を支配していたという前例を確立させ、アジア本土における日本帝国主義の拡大を隠蔽するための工作であったことは否定できない。

<sup>21</sup> Ho, Ping-ti (1998). "In Defense of Sinicization: A Rebuttal of Evelyn Rawski's "Reenvisioning the Qing"". *The Journal of Asian Studies*. 57 (01): 123-155.

<sup>22</sup> 下記の4冊。

1. Evelyn Sakakida Rawski(1998). *The Last Emperors: A Social History of Qing Imperial Institutions*. Berkeley: University of California Press.

2. Pamela Kyle Crossley (1999). *A Translucent Mirror: History and Identity in Qing Imperial Ideology*. Berkeley: University of California Press.

3. Edward J. M. Rhoads(2000). *Manchus and Han: Ethnic Relations and Political Power in Late Qing and Early Republican China, 1861-1928*. Seattle: University of Washington Press.

4. Mark C. Elliott (2001). *The Manchu Way: The Eight Banners and Ethnic Identity in Late Imperial China*. Stanford, CA: Stanford University Press.

<sup>23</sup> 旗田巍「日本における東洋史学の伝統」『歴史学研究』270号、1962年、p.34。

<sup>24</sup> Elliott, M. C. (2001). *The Manchu Way: The Eight Banners and Ethnic Identity in Late Imperial China*. Stanford, CA: Stanford University Press: 31.

<sup>17</sup> 同論文、p.37。

<sup>18</sup> 宮崎市定（前掲論文）、p.55；（前掲書）、p.337。

<sup>19</sup> Ho, Ping-ti (1967). "The Significance of the Ch'ing Period in Chinese History": *The Journal of Asian Studies*. 26 (02):189-195.

<sup>20</sup> Rawski, E. S. (1996). Presidential Address: Reenvisioning the Qing: The Significance of the Qing Period in Chinese History. *The Journal of Asian Studies*. 55(4): 829-850.

しかし、ここで問題となるのはこの事実よりも、出発点からくる研究範囲の相違である。当時の日本における主な目標は自己正当化であったため、その研究範囲は地域で言うと主に満洲、モンゴル、朝鮮など比較的日本に近い地域であった。また、時代についても主に清朝初期に関する考察がなされていた。他方、「新清史」には当時の日本における「清朝史」のような明白な政治的意図はなかったため、その研究範囲も James A. Millward の “*Beyond the Pass: Economy, Ethnicity, and Empire in Qing Central Asia, 1759-1864*”<sup>25</sup>のように新疆だけでなく、Peter C. Perdue の “*China Marches West: The Qing Conquest of Central Eurasia*”<sup>26</sup>のように世界的な視野に立ち、満洲とオスマンの比較などを行うものもある。また、ほとんどの「新清史」研究は時代として入関後を主に研究していることから、「清朝史」と「新清史」は時期的な意味でも研究範囲が異なっていた。

もう一つの大きな相違点としては研究方法が挙げられる。先述したように、日本における「清朝史」は実地調査と実証研究を重視しており、研究者自身も満文をはじめとする非漢言語に通じている。しかし、実証研究より理論研究を重視する「新清史」では、「満文などの非漢言語によって作成された檔案史料の重要性について述べているが、…〔中略〕…これらの史料がどれほど重要な価値を有しているのか、どのような重要な問題がこれらの史料によって突破されたかについては、十分に表すことができていない」<sup>27</sup>とされているように、必ずしもすべての研究者がそれらの非漢言語を理解しているわけではない。そのため、日本における「清朝史」研究は精力的な実地調査と精緻な実証研究を得意としているが、問題点として研究範囲に限られる、研究の進捗が比較的遅く、革新的な理論転換が起こりにくいなどが挙げられる。一方、「新清史」は、特定の地域だけにとらわれず、巨視的な視点で広い範囲をとらえているため、使

用する言語も満洲語、モンゴル語、漢語だけでなく、欧米諸国の言語を多用している。そのため、特定の言語に精通している人はそれほど多くない。また、「ここ二、三十年の西洋史学は理論においても研究方法においても常に変化が起きており、新たな研究領域も次々と出現し、旧来の観点は常に更新ないし淘汰されつつある」<sup>28</sup>とされているように、理論転換も頻繁に起きている。つまり、「清朝史」と「新清史」の二つ目の相違点としては満洲語をはじめとする少数民族言語の高い理解能力を必須とするか否かと、実証と理論のどちらを重視するか、という研究方法が挙げられる。

では、中国は「新清史」に対し、どのように反応したのだろうか。当初、中国におけるほとんどの研究者は政治的な原因などから「新清史」に対して否定的な態度、もしくは黙殺しようとしていた。しかし、近年ではその学術的意義を認め、中国史研究の一部に取り込む動きが出ている。2010年8月9日から11日にかけて「“清代政治与国家認同”国際学術研討会」が北京で開かれ、これが中国として初めての「新清史」研究との大規模な意見交換の契機となった。また、大会で議論された内容を44本の論文にまとめた『清代政治与国家認同』<sup>29</sup>も2012年に出版された。さらに2010年には『清朝的国家認同：“新清史”研究与争鳴』<sup>30</sup>と「新清史」関連の論文をまとめた著作が出版され、2011年には黄興涛<sup>31</sup>や楊念群<sup>32</sup>、2012年には李愛勇<sup>33</sup>や党為<sup>34</sup>などと中国国内の研究者から相次いで「新清史」関連の研究が発表された。その後も2015年に姚大力が「不再說“漢化”的旧故事——可以從“新清史”學習什麼」<sup>35</sup>で「新清史」

<sup>28</sup> 劉小萌（前掲論文）、p.4。

<sup>29</sup> 劉鳳雲・董建中・劉文鵬編『清代政治与国家認同』上・下巻（社会科学文献出版社、2012年）。

<sup>30</sup> 劉鳳雲・劉文鵬『清朝的国家認同：“新清史”研究与争鳴』（清史研究叢書）、（中国人民大学出版社、2010年）。

<sup>31</sup> 黄興涛「清代滿人的“中国認同”」『清史研究』2011年第1期、2011年、pp.1-12。

<sup>32</sup> 楊念群「超越“漢化論”与“滿洲特性論”：清史研究能否走出第三条道路？」『中国人民大学学報』2011年2期、2011年、pp.116-124。

<sup>33</sup> 李愛勇「新清史与“中華帝国”問題：又一次冲撃与反応」『史学月刊』2012年第4期、2012年、pp.106-118。

<sup>34</sup> 党為『美国新清史三十年：拒絕漢中心的中國史觀的興味起与發展』上海人民出版社、2012年。

<sup>35</sup> 姚大力「不再說“漢化”的旧故事——可以從“新清史”學習什麼」『東方早報·上海書評』、2015年4月5日。

<sup>25</sup> Millward, J. A. (1998). *Beyond the Pass: Economy, Ethnicity, and Empire in Qing Central Asia, 1759-1864*. Stanford, CA: Stanford University Press.

<sup>26</sup> Perdue, P. C. (2010). *China Marches West: The Qing Conquest of Central Eurasia*. Cambridge, Mass: Belknap Press.

<sup>27</sup> 定宜庄、歐立德(Elliott, M. C.)（前掲論文）、p.144。

の中心的概念である「漢化」<sup>36</sup>を「旧故事」、つまり「古い話」としたことや、同年の『中国社会科学報』に掲載された李治亭<sup>37</sup>、鐘焜<sup>38</sup>、劉文鵬<sup>39</sup>、楊益茂<sup>40</sup>の4本の記事などからもわかるように、中国国内では「新清史」の学術的価値は認められつつあるものの、「漢化」を否定する主張などについては依然として反対が根強くある。そして、2016年においても劉文鵬が「内陸亜洲視野下の“新清史”研究」<sup>41</sup>で「新清史」は「内陸アジア」という地理的、文化的概念を政治的概念に置き換えたことにより、中国の多民族国家としての正当性を否定していると批判していることから<sup>42</sup>、現在の中国においては「新清史」の学術的価値については認めつつも、その主張には依然として反対する流れに変化はないようである。

#### おわりに

以上、「清朝史」と「新清史」の相違点や、中国における反応について整理を行った。「新清史」の清代を明代の「延長」ではなく「断裂」とする主張に対する評価はここでは控えるが、「新清史」が清史研究で果たしてきた役割は極めて大きいものであった。例えば、「南北」ではなく「東西」の国土の重要性を強調し、清史を研究してきたことは、これまでの研究では見落としがちであった「辺疆」が歴史において果たしていた役割や、特徴などの研究を大きく推し進める結果となった。とは言え、Mark C. Elliottが「我々は『新清史』のどのような論点が時間の試練を通過できるか待たなければならない。これに対し、我々が想像しうる最も良い結果はいつかここでいう『新清史』が時代遅れに

なり、新たな『新清史』に取って代られることだろう」<sup>43</sup>と論じているように、もちろん「新清史」の主張がすべて正しいわけではなく、いずれは新たな「新清史」に取って代られるべきだろう。

しかし、新たな「新清史」の出現には言語という大きな課題が存在する。先述したように、清は多民族国家である。それゆえ、使用されていた言語も主なものだけで満洲語、モンゴル語、漢語、ウイグル語、チベット語の五つにのぼるが、これらすべての言語を実用的なレベルで把握している研究者はほとんど存在しない。そのうえ、「新清史」研究者は世界各地に散在しており、それらの研究者が論文を執筆する際に使用する言語も英語、フランス語、ドイツ語などの欧米諸国言語にとどまらない。これらすべての言語に通じ、論文を読み、主張を理解することが可能な研究者は存在しない。そのため、清史の各「研究分野」間でこれまで以上に密接な連携を取り合い、いわゆる「新清史」と「旧清史」などがそれぞれ根拠としている史料、論点を「正確」に理解したうえで中国と諸外国の垣根を越えることは、清朝の歴史についてより「全面的」に把握し、研究をさらに活発化させるために必要不可欠である。

以上の点を踏まえ、侍衛という特定の集団を取り扱う筆者も、これまでのように実証研究を重視するだけでなく、多くの言語で構成された、より広い視点を持つ新たな理論を取り入れ、研究を進めて行きたい。

<sup>36</sup> 「新清史」研究者の中には「漢化」という語の使用に反対し、「涵化(Acculturation)」の使用を提唱する研究者も存在するが、ここでは一般的な用語である「漢化」を使用する。

<sup>37</sup> 李治亭「“新清史”：“新帝国主義”史学標本」『中国社会科学報』2015年4月20日、第728期。

<sup>38</sup> 唐紅麗「“新清史”学派的着力点在于話語构建——訪中央民族大学歴史文化学院副教授鐘焜」『中国社会科学報』2015年5月6日、第734期。

<sup>39</sup> 劉文鵬「正確認識“新清史”与“内陸亜洲”」『中国社会科学報』2015年5月13日、第737期。

<sup>40</sup> 楊益茂「“新清史”背后的学風問題」『中国社会科学報』2015年7月7日、第761期。

<sup>41</sup> 劉文鵬「内陸亜洲視野下の“新清史”研究」『歴史研究』2016年第4期、2016年、pp.144-159。

<sup>42</sup> 同論文、p.159。

<sup>43</sup> 欧立德(Elliott, M. C.)「満文檔案與新清史」『故宫學術季刊』第24卷第2期、2006年、p.15。